

消化管異物の1症例

徳之島徳洲会病院

発表者；初期研修医 廣田 賀之

共同演者；石根 周治、若山 昌彦、小野 隆司

症例は56歳、男性。主訴は嘔吐。現病歴は大量の嘔吐、腹痛をみとめ来院。外来検査にて腸閉塞症状を認めイレウス管挿入後に入院。既往歴として脳炎後遺症による精神発達遅延をみとめ施設に入所中であり、脳梗塞後遺症もあり歩行時のふらつきが続く。虫垂炎手術の既往があり、異物誤飲の既往は無い。家族歴は特記事項無く、飲酒、喫煙歴等も無かった。入院時身体所見としては、腹部は膨隆・軟であり、心窩部の圧痛は軽度、反跳痛もなく、そのほか特記すべき所見はなかった。イレウス管挿入後のガストロ造影後、腸閉塞はすぐに解除された。腸閉塞解除後の消化管の検査にて、盲腸にビニール様の異物を確認。回腸末端近くの異物が腸閉塞の原因であり、ガストロの腸管蠕動で腸閉塞は解除されて異物が盲腸に至った可能性を考えた。また、消化管精査中で下部食道にPTPの食道内異物も発見され除去された。今回、腸閉塞は解除され開腹手術に至らず、内視鏡治療によって安全に治療しえた。消化管異物に対する内視鏡治療の文献的考察を加えて報告したい。